



編集発行

青少年赤十字
福島県指導者協議会
日本赤十字社福島県支部
〒960-1197
福島市永井川字北原田17
TEL024(545)7998

人間を救うのは、人間だ。
Our world. Your move.

困難を乗り越える力を



日本赤十字社福島県支部
事務局長 野崎 洋一

日本赤十字社福島県支部では、昨年度に引き続き平成二十五年度も「赤十字すまいるぱーく」事業を県内六市で順次開催しています。九月二日から十三日までの十二日間、須賀川市の岩瀬地域トレーニングセンターで今年度二会場目となる「すまいるぱーく」を開催しましたが、目を輝かせながら会場内で元気一杯遊ぶ子どもたちの笑顔がとても印象に残りました。

この事業は、就学前の子どもたちを対象に、屋内の体育施設に巨大エア遊具やボールプールなどを設置し、放射線の影響を気にせずに思い切り遊んでもらおうと、日本赤十字社が海外からの救援金によ

り実施している復興推進支援事業の一つです。昨年度は県内の六会場場で保護者も含め延べ三万五千五百五十人の入場者がありました。今年度はそれを上回る勢いです。

県内では、原発の事故に伴う避難指示区域等は別にして、その他の地域では子どもたちが時間を過ごすことの多い学校や公園等を優先して除染が行われており、外で運動をしたり遊んだりできる環境が整ってきてはいますが、まだまだ子どもたちの外遊びに不安を感じる親御さんが多いというのが現状のようです。

福島県は東日本大震災の他の被災地とは違い、これから長く原子力発電所の事故と

向き合っていかなければなりません。大人はもちろんのこと、本県の子どもたちにとっても、原発事故はこれから生きていく上での大きなハンディであることは間違いないでしょう。福島県の子どもたちは様々なハンディを乗り越えて明るく健やかに育って欲しいと強く願うものです。

福島県の復興に向けて、国や自治体による子どもたちへの健康対策や教育環境の整備等の施策がこれからも数多く展開されると思います。しかしそれだけでは十分ではありません。福島の子どもたちにとって何よりも重要なのは、困難を乗り越え強く生きぬく力を持つことではないでしょうか。そしてそれは誰かから与えられるものではなく、子どもたち自らが様々な体験を通して身につけてゆくものだと思います。

青少年赤十字では、子どもたちに身につけて欲しい生活態度として「気づき」「考え」

「実行する」の三つを掲げています。私は今年四月、日本赤十字社福島県支部事務局長に就任して以降、青少年赤十字の活動について知るにつけ、今の福島の子どもたちは正に青少年赤十字の取り組みが必要なのだと強く思うようになりました。

幸い福島県の青少年赤十字の活動は、指導者の先生方のご努力により全国的にも高く

評価されています。日本赤十字社福島県支部は、優秀な指導者の先生方とともに、福島県の子どもたちが青少年赤十字の活動を通して、自分の力で未来と切り開いていく健やかでたくましい子どもたちに成長していけるよう、全力で取り組んでまいります。青少年赤十字指導者協議会の皆様には、今後より一層のご支援ご協力をお願いいたします。

平成二十五年度青少年赤十字 福島県指導者協議会総会開催

「東日本大震災」それに伴う東京電力第一原子力発電所の事故による放射能問題の対策の一つであります除染等も学校優先で行われ環境整備の動きが始まっています。しかし再開されていない学校もあり教育活動はいまだ厳しいものになっています。「青少年赤十字活動」も同様に制限を受けていますがそれでも二年ぶりに学校公開ができたことなど少しずつ戻ってきているように感じます。そんな中五月九日(木)に日赤県支部で福島県教育委員会教育長



平成25年度 青少年赤十字 福島県指導者協議会役員名簿

役職名	氏 名	学 校 名
会 長	福井 一明	福島市立福島第一小学校
副会長	中村 巧	郡山市立大島小学校
副会長	佐藤 則之	三島町立三島小学校
副会長	渡邊 望	福島県立磐城桜が丘高等学校
監 事	佐川 幸信	白河市立表郷小学校
監 事	星 秀美	浪江町立津島中学校
監 事	田村 秀夫	福島県立福島東高等学校

並びに高校の県と各地区の会長が出席されて指導者協議会総会が行われました。

会議では前年度の事業・会計決算報告、活動の反省、今年度の努力目標、事業計画が審議され、すべて承認されました。

前年度の反省・課題として教職員の青少年赤十字に対する意識・認識の差がみられ、それが研修不足などに表れているようです。反面、「青少年赤十字活動」が特別なことととらえず学校教育活動と大いに関わりがあることをもっとPRしてゆきたいと言う声もありました。教職員の多忙や小規模校では出張がしにくい、研修の参加者の確保が難しくなっているなどが出て各地区での工夫がうかがえるも

のなっています。

今年度の努力目標は昨年度に引き続き、加盟の推進、活動の推進充実、情報交換推進、指導者の育成、関係機関との連携が挙げられました。

次いで役員の変更が行われ、昨年に引き続き福井一明会長が選出されたのを始め上記の役員の方々が選出されました。

平成二十五年度後半の 主な行事予定

● 青少年赤十字指導者研修会 並びに学校公開

期日 十月四日(金)

場所 会津美里町立新鶴小学校、会津美里町立新鶴中学校

● 福島県高等学校青少年赤十字 連絡協議会秋季総会

期日 十一月十九日(火)

〃 二十日(水)

場所 郡山市磐梯熱海温泉 清陵山倶楽部

● 青少年赤十字福島県指導者 協議会第二回会長会

期日 十一月十八日(月)

場所 日赤県支部

● 青少年赤十字作品募集優秀 作品表彰式

期日 十二月実施予定

場所 日赤県支部

● 指導主事対象青少年赤十字 研究会

期日 一月十五日(水)

〃 十七日(金)

場所 神奈川県葉山町湘南

国際村センター

● 青少年赤十字スタディー ンター

期日 三月二十二日(土)

〃 二十七日(木)

場所 山梨県山中湖村東照館

平成二十五年度

青少年赤十字指導者講習会

今年度の講習会は八月十九日(月)～二十一日(水)の二泊三日左記の日程で国立磐梯青少年交流の家で開催されました。

今年度は小学校から三十四名、中学校から九名、高校から九名、計五十二名での開催となりました。高校の九名の中には遠く三重県からの三名の先生方も含まれています。一校で複数の参加が二校あり各地区で指導的な先生方の参加の講習会でした。

ほとんどが初めての参加の先生で青少年赤十字の特徴あるプログラムが組まれた講習会になっています。特に初日のプログラムについてアンケートでは余裕が欲しいとの声が多くありました。それは青少年赤十字の特徴である「先見」、「指示のない生活」

「ボランティアサービス」などの話があり、理解する間もなくプログラムの流れを止めないようにする先生方の戸惑いから来ているように感じました。二日間からの研修は初日と異なり「指示のない生活」(掲示板の活用)などを理解された活動になってゆきます。最終日には同じ班の先生方と名残を惜しむ姿が見られ疲れたが充実していたとの声も聞かれました。

主な内容と講師(敬称略)

○各班のホームルーム担当

一班 和田 有司

(伊達市立伊達東小学校)

二班 大浪 政輝

(前青少年赤十字指導講師)

三班 箱崎 仁

(いわき市立小名浜第三小学校)

四班 山内 真一

(会津若松市立松長小学校)

五班 川村 卓也

(福島市立第二小学校)

六班 古川 盛也

(前青少年赤十字指導講師)

七班 田村 享子

(磐城第一高等学校)

○ 講義

「赤十字と青少年赤十字」

赤十字在日指導講師 川田 昌利

○ 演習ワークショップ

「JRC活動って?」

田村 享子

○ 実技講習

・「レクリエーションとそ



8月19日から21日 日程表

	8月19日 (月)	8月20日 (火)	8月21日 (水)
6:15		起床 VS 活動	起床 VS 活動
7:00		朝の集い	朝の集い
7:20		朝食	朝食
9:00			
9:30	受付	実技講習 救急法短期講習	実践報告 「研究推進校の実践」
10:00	開会式 オリエンテーション		
10:30			
11:00	講義 「赤十字と青少年赤十字」	講話 「学校教育と青少年赤十字」	ワークショップ 「JRC 活動を広めよう」
12:00	昼食	昼食	昼食
13:00			
14:30	ワークショップ 「JRC 活動って？」 実技講習 「レクリエーションとその指導」	実技 「フィールドワーク」	まとめ 閉会式
16:00	ホームルーム	自由時間	
17:00	タベのつどい	タベのつどい	
18:00	夕食 入浴	夕食 入浴	
19:00	ホームルーム	ホームルーム	
20:00	交流会	フィールドワーク反省会	
21:00	班長会議 入浴	班長会議 入浴	
22:00			
23:00	消灯・就寝	消灯・就寝	

の指導」

福島県レクリエーション協会

佐藤 喜也

・「救急法短期講習」

日本赤十字社救急法指導員

酒井 紹雄・大浪 政輝・

古川 盛也・田村 享子・

金子久仁子

○講話

「学校教育と青少年赤十字
について」

福島県教育庁会津教育事務

所指導主事 岡崎 秀明

○フィールドワーク

【青少年赤十字賛助奉仕団】

藤田 伸朔・酒井 紹雄・

大浪 政輝・古川 盛也

【指導スタッフ】

和田 有司・川村 卓也・

山内 眞一・箱崎 仁・

田村 享子

【日赤県支部】

石田 政幸・日色沙織里

○実践報告

「研究推進校の実践」

田村市立緑小学校

今野千鶴子・白岩 聡子

田村市立移中学校

五十嵐 堅一
会津美里町立新鶴小学校
安積三枝子
会津美里町立新鶴中学校

指導者講習会に参加して

指導者講習会から

学んだこと

会津若松市立城南小学校

遠藤 和也

私は、この三日間の講習で多くを学びました。特に、受講者が「知らず知らずに」指導者の意図する行動ができるようになるプログラムに感心しました。

その一つが、受講者に「細かい指示を出さず、掲示板を活用させること」です。プログラムが進むにつれ、受講者は指示や連絡がなくても、掲示板を活用し時間のやりくりをしながら生活できるようになりました。

二つ目は「仲間との意見交換や信頼の大切さ」です。三日間の活動の中で、私も班員に考えを伝え、得意分野には

鈴木 智子
○ワークショップ
「JRC 活動を広めよう」
(各HR担当)

率先して取り組みました。そして、いつの間にかよりよいものを創ろうとする自分たちがいることに気づきました。これはどの班も同じで、「JRCのCM作り」や「フィールドワークの俳句作り」の時に、各班の特色のある工夫された活動が見られ、私も大いに刺激を受けました。

ただ、私がJRCの指導者として子どもたちの前に立つ時のことを考えると、私のよ

うな感想を持たせたり、自主的に行動させたりできるか私は不安になりました。日常の学校生活で、私は子どもたちに細かく指示を出しがちです。その割に、子どもたちに伝わらないことが多く、自己嫌悪に陥ります。このような私でも子どもたちが自主的に何をすべきか考えたり、行動したりできるように指導できるのか不安になります。

わたしは、どうしたらこのような指導ができるのか、もう一度講習会を振り返りました。そこで気づいたことは、このプログラムでは、指導される側の心の壁をなくし、参加者どうしが互いをよく知り信頼し合えるよう、レクリエーションの指導技術が適切なことです。また、活動の目的を受講者にきちんと理解させていることにも気づきました。例えば、フィールドワークにしろ、ワークショップにしろ、各班が「何のために、いつまで、何をする」という目的意識を明確に持っていました。これは、自主的な活動を促す大切な要素です。

私は、今回の指導者講習会で学んだことを活かし、子ども

もたちが自主的・自発的行動ができるよう、今後も研鑽を積みみたいと思います。貴重な機会をいただき、有難うございました。

じわり感じる 良さでした

福島市立荒井小学校

國分 和子

夏休みもあと一週間という日、私は初めて青少年赤十字指導者講習会に参加しました。正直、何で私が、という思いがありました。

受付を終え、最初の講義での言葉、「皆さん、どうしてここにいるのでしょうか。戸惑いと迷いでいっぱいですね。しかし、三日後にはきつとちがつた思いで帰ることでしょう。」その通りでした。学校の児童会奉仕委員会担当と言うことで受けた研修、何でだろうという思いで来ていました。受け身百パーセントで臨んでいました。でも、三日後はどうだろう？

話はこうも続いた。「今後の活動は掲示板のみでの連絡です。皆さんで気づき、考え、



行動していただく。」ということだ、言われたことをこなしていく活動ではないのか、不安な気持ちで活動がスタートしました。

しかし、部屋のメンバーや班のメンバーとの顔合わせ、楽しいおしゃべり、ホームルームそして研修を重ねていく内に不安はすっかり消えていきました。そして班のメンバーと一緒に考え、もっと楽しく活動していきたいと思えるようになってきました。

三日間の多くの活動の中で一番心に残ったのはコマースィナル作り。私たちの班は、幼児対象で J R C 活動を伝えるものでした。私はすぐにアンパンマンだと思いました。班のメンバーに認められたときはとてもうれしく、どんな

んアイディアも出てきました。それ以上に真剣に考えを出してゆく班のみんなが素敵でした。

準備の活動はとても充実したものでした。ストーリー作り、小道具作り、役割分担とより良いものを作ろうという思いで一生懸命に考えて作りしました。気づけばあつという間に消灯の時間になっていました。

最終日の本番直前も、リハールにリハールを重ね、気付けば一番最後の班になっていました。そして本番。最高の出来。みんなの顔が笑顔でした。

この時、今回の研修にきて本当に良かったと思えました。一班の皆さん、本当にありがとうございました。部屋の皆さん、そして準備を下さった先生方、本当に感謝いたします。

青少年赤十字指導者講習会の良さは参加しないとわかりません。是非、「気づき、考え、実行する」を体験してみてください。



体験したからこそ分かる、 気づきの瞬間

三重県立木本高等学校

川上真由子

「先生もトレセンを経験してきます！頑張ってくるね！」こう生徒に伝え三重県を出発しました。今年から J R C 顧問になり、八月上旬に初めて高校生トレセンに指導者として参加したばかりです。生徒の心と行動の変化を見る事が出来たのですが、自分自身が指導者としてどう生徒をサポートするか、戸惑う部分も多かったという反省もあり、この研修では様々な活動を自分が実際に体験することで、沢山のヒントを頂きました。

高校生トレセンでは「もっと積極的」に「自分から」と何度も生徒に声をかけていたのですが、自分が研修のグループに入ってみると自ら「気づき、考え、実行する」の難しさを改めて感じました。

この研修はそんな自分の心に火をつけてくれるような環境でした。「出しものの発表」「コマースィナル作り」一風変わった課題。振り返りの時間では

真面目な反省あり、喜び笑合う場面あり…。J R C ならではの研修内容に取り組んでいくうち、自分で「考え」、自分なりの「リーダー」を目指して「実行」するようになり、そこから自信ややる気が生まれた気がします。そして後に、これはこの研修に沢山の「仕掛け」があったからだという事を知りました。研修の内容自体はもちろん、一つ一つの研修の組み方、スタッフの方々の声掛けやサポート。気づくのは本人だけでなく、そのきっかけやチャンスを作る環境を与えてあげる事は出来る。指導者としてトレセンに参加しただけでは分かんかった、自分が参加者の立場として、考え、楽しみ、感動したからこそ分かった事だと思えます。これからの生徒の活動や来年度の際には是非参考にさせて頂き、少しでも多く気づきの瞬間を沢山の生徒達に感じてほしいと思っています。

また、今回この機会を頂いたのは元々生徒が作ってくれた福島県とのつながりのおかげです。福島県磐城第一高校と三重県立木本高校は、二年ほど前から交流があり、六月



に行われた J R C 福島県交流事業には本校の J R C 部員二名が参加させていただきました。その事業を通し、生徒達が福島県との絆を深めていく姿、防災や減災、復興について真剣に考えるようになった姿を見て、この交流がいかに生徒達にとって大きなものであるかを側で感じておりました。そういった事からも、今回こうして自分自身もこの福島とのつながりに関わらせていただけた事とても嬉しく思います。個性豊かな七班（スター☆イチロー班）の先生方を初め、三重県から参加した私達を暖かく迎えて下さった福島県の先生方、大変な準備の中研修を作り上げて下さったスタッフの皆様方、そしてこの研修参加のきっかけを作ってくれた三重県と福

島県の高校生達、磐城第一高校の田村先生に心より感謝いたします。三重県から福島県まで約八百キロ。その距離の



青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」の具体的事業として県内の青少年赤十字メンバーを海外の赤十字加盟国へ派遣し、同国の青少年赤十字メンバーたちとの交流研修を通して、国際性豊かな青少年を育成し、本県青少年赤十字活動のより一層の推進をはかることを目的に実施されました。

例年実施されていましたが東日本大震災に伴い二年間見送られた経緯があります。今年度は復興推進支援事業の一つとして全県下高校に参加の希望者を募りました。東日本大震災による地震・津波に加え福島県では福島第一原子力発電所の事故による被害、その後遺症にまだあえぎながらも復興を模索している状況にあります。この事実を伝えるとともに支援を受けたことに

長さに負けない、期待以上の充実した時間を本場にありがとうございました。

対する感謝も伝え交流をはかりました。

参加者（敬称略）

日下 輔（福島高校二年、生徒代表）、鈴木 悠太（学法福島二年、生徒副代表）、仲川 優葵（本宮高校二年）、橋本 裕太（郡山北工業高校三年）、安藤 摩耶（須賀川高校二年、生徒副代表）、中村アイリン（猪苗代高校三年、生徒副代表）、新田万里子（喜多方高校一年）、田中さくら（いわき総合高校一年）、丹野 洋仁（湯本高校二年）、菅野有里子（相馬東高校二年）、吾妻 久（須賀川高校教諭、团长）、小林みゆき（福島工業高校教諭）、青木由紀子（平養護学校教諭副团长）他支部職員二名、計十五名



福島県立須賀川高等学校

教諭 吾妻 久（团长）

今回のフィリピン派遣実施にあたって、計らずも团长の任を預かり、まず第一に日本赤十字社福島県支部をはじめとする関係者の方々のお力添えにより、派遣メンバーが過なくその日程を終えることができたことに胸をなでおろしている。派遣中のフィリピン赤十字や各学校との交流のためにはできる限りの準備はしたつもりではあるものの、様々な点で不安をかかえての出発であった。しかし、派遣生徒が良くも悪くもおおらかな性格の持ち主ばかりで、各自が自分の役割を自覚し、これまでに培った「ボランティアサービス（VS）」と「先見」を派遣準備から派遣期間中に至るまで実践してくれた。特に今回の派遣には J R C 加盟校以外からの生徒の参加があったが、お互いに同じ目的意識を持って準備活動に取り組み、次第に心をつなげる

● 日 程

月 日	内 容
8月11日(日)	移動日
8月12日(月)	フィリピン赤十字本社訪問、ラス・ピニャス副支部訪問、パンブール教会見学、ラス・ピニャス高校訪問交流
8月13日(火)	バタアン支部訪問、バタアン公立学校訪問交流
8月14日(水)	バタアン原発(稼働していない原発)見学、サンギレモ教会見学
8月15日(木)	クラーク飛行場にて飛行機事故救急訓練見学、神風特攻隊記念碑見学
8月16日(金)	ケソン市支部訪問、パヤタス小学校訪問交流、ソルト・パヤタス訪問
8月17日(土)	アメリカ戦士墓地見学、タガイ・タール湖見学、メガモール見学
8月18日(日)	移動日

ことができたようになったのも、日頃の J R C 活動を通して円滑な人間関係を構築するスキルを身につけたことによる成果である。また同行した各高校の先生方も、フィリピンへの渡航経験をはじめとして豊かな国際交流事業のご経験から生徒を厳しくも温かくご指導していただいたことが、今回の成功につながった。



これまでに行われたフィリピン派遣と二年ぶりに再開した今回のそれとの異なる点は、東日本大震災以降初めての派遣であることだ。震災後に支援をいただいた国の一つであるフィリピンに直接感謝の意を伝えることは今回の派遣の大きな目的の一つであった。その目的をどの程度達成できたのか、正直なところ自信はない。むしろ、今思うのは、フィリピンの方たちがもっと大きな心で私たちを迎えてくれたということだ。

実際、私たちがフィリピンに到着した当日はちょうど台風がフィリピン北部を通過中で、フィリピン赤十字はその対応に追われており、その台風の影響で休校中なのにも関わらず交流会を実施していただいた学校もあった。派遣

中、訪問地に予定より二時間近く遅れて到着したにも関わらず、快くプログラムを実施していただいた。日本であれば「申し訳ございませんが…」と言われても仕方がないと思われる場面が何度あったが、それでも、臨機応変に我々を迎えてくださるフィリピンの方々の姿に、心が打たれる思いがした。こちら側の目的や意図をはるかに上回る心遣いで、日本から来た高校生をはじめとする私たちが有意義な時間が過ごせるようにと奔走してくださった。

訪問時も現在も福島県はいまだなお原発事故の余波で、風評被害や将来への不安に苛まれている人々が数多く存在し、日本だけでなく世界の人々にもその現状を知らせたいというのがもう一つの目的でもあった。しかし、今回の訪問を通して、そのフィリピンも常に自然災害で苦しむ人々や地域が存在し、稼働寸前の原発まであることを知った。様々な理由から貧富の差が増大し、その両方の姿を目にしてきた。失業問題や国内紛争など、フィリピンの人たちにも私たちと同様の将来に対する不安や心配はある事実



を目の当たりにしてきた。そのような状況の中で、フィリピン赤十字のスタッフやボランティアが前向きに諸問題に取り組み姿や、国民が勇気を持って原発の稼働を食い止

め、私たちのような海外からの訪問客を温かく受け入れる姿に接し、お互いに支援したりされたりする立場にいつでもなりうることを忘れてはならないと思った。フィリピン赤十字の活動方針「Always First. Always Ready. Always There.」に、すぐそこにある未来に立ち向かう姿勢が見えた。

派遣終了にあたり、派遣中に出会った人々とこれからもお互いの活動について情報交換したり、この経験を具体的な赤十字活動や国際貢献に結び付けることは、派遣された

私たち全員の責務であると考えている。特に参加した生徒たちが、JRCをはじめ県内でできるだけ多くの人たちと志を同じくする個人あるいは団体と、意見交換や新たな活動をはじめることが、今回の派遣を支援して下さった方たちへの恩返しにもなるのではないだろうか。その意味で、参加メンバーにとって、この経験は赤十字にとどまらず、様々な形で国際協力の場面に役立つ財産になることは間違いないと確信している。

最後に、今回のフィリピン派遣にあたって、その再開を強く後押しして下さった福島県青少年赤十字指導者協議会の先生方、成田空港まで見送りに来て下さった鶴沼先生をはじめ、同行していただいた金子先生と石田先生、および日本赤十字社福島県支部関係者のみなさま、派遣メンバーの生徒および教員を快く送り出していただいた関係各校の諸先生方、フィリピン赤十字のみなさま、訪問先の各学校の先生方、NGOソルトパヤタスの関係者のみなさま、そして私たちの派遣期間中毎日朝早くから夜遅くまでコーディネートしてくれたガイド

のリンさんと運転手さん、ジャーナリストの藍原さん、その他フィリピンでお世話になった全ての方へ、心から感謝申し上げます。

二〇一三年九月某日 記す

福島高校二年(生徒代表)

日下 輔

今年の夏、私は青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」に参加しました。八日間のフィリピンでの経験は私にとってとても刺激的で充実したものでした。震災後初のフィリピン派遣事業であったため、福島県青少年赤十字の代表として、「福島は今」を正しく伝えるその責任と自覚を胸に福島を出発しました。派遣三日目バタアン州へバスで移動中、一人の少女がフェンス越しにバスへ近寄って来ました。言葉は分かりませんが、訴えていることは分かりました。彼女は食べ物をおねだっていました。何か渡してあげようと思いました。そこで彼女を渡すことができたのか、ただ今をやりすぎだけに過ぎないのではないかと自分に問いかけま

した。結論として渡すことではないと何も渡しませんでした。見て見ぬふりをするようにでつらかったですが、最善の選択だと信じました。彼女と出会って感じたもどかしさや悔しさを忘れずに本当なこと何かを見つけ、いつか貧困問題解決の手助けがしたいと思います。

また、派遣六日目はスモークーマウンテンで生活する人々が住むパヤタス地区を訪れました。パヤタス地区へ入り、バスのドアを開けたとたんバスの中へ独特の臭いがたちこめ、ここは本当に貧困地域だと感じました。現地のスタッフからパヤタス地区の説明を受けた後、私たちは四つの班に別れ、それぞれ家庭を訪問しました。トタン板やベニヤ板で屋根が作られ、床はそのままの地面でした。頭をぶつけそうなほど低い天井には電球が一個ぶら下がっていました。私が訪れた家庭のお母さんは一日の収入は、ゴミ山からペットボトルや新聞紙を拾い、百〜百五十ペソ（日本円で二百〜三百円くらい）、布で織物などを作り、それら売ったお金も収入の一部になると言っていました。安定



した収入が無いいため食べ物が無い日もあることを知り、私はそれまで何気なく言っていた「いただきます」「ごちそうさまでした」の重みを感じました。震災後生活が一変し、当たり前の生活は明日にはもう無いかもしれないと身をもって感じたはずが、たった二年でそれを忘れ、一日三食が当たり前だと感じていた自分に気づき、愕然としました。家庭訪問を終えるときに「同情はしないで欲しい。私たちの発展を見守ってほしい。」と言われ、先進国が発展途上国を支援する動きが世界にもっと広まれば、貧困問題を解決することができるかもしれない、と思いました。

ぐに鼓笛の演奏が始まりました、二百〜三百人くらいの生徒たちが大歓声で出迎えられたりと、驚きの連続でした。また、小学生の子どもたちはフィリピンの伝統的な踊りやフィリピンの誕生劇を披露してくれました。そのお返しとして私たちは福島のことを伝えるプレゼンやよさこい、歌などを披露しました。回数を重ねていくごとに満足のいく発表ができる様になり、みんなに喜んでもらえたので良かったです。

新田万里子

喜多方高校一年

今回のフィリピン派遣は、いままでに経験してないことでした。支部訪問ではいくつ

この八日間の滞在で感じたフィリピンのおもてなしの文化、人のあたたかさには本当に感動しました。またいつかフィリピンへ行き、人々の幸せのために貢献したいと思えます。最後に、日本赤十字社福島県支部の方々、八日間共に過ごした先生方やメンバーの皆さん、出会えた全ての方々に感謝します。ありがとうございました。



で、私たち十五人を温かく迎えてくれました。踊っているときの笑顔はとても印象的でした。フィリピンの子どもたちに、折り紙や名刺を渡そうとすると積極的に手を伸ばしてくれ、帰るときみんな手を振ってくれました。

バタアン原発の見学では、原発の中へ入っていくのはめったにできない体験でした。原発の建物を見たとき、壮大な感じがしました。稼働しようと思ったこともあったようですが、旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電の事故、日本の福島第一原子力発電所の事故があったため稼働するという話はなくなりました。一度も使っていないと聞いて、最初はもったいないなと思いましたが、福島原発事故と同

かの支部を回り、フィリピンの赤十字の活動について説明を受け、建物内の見学をしました。その中でも六日目に訪ねたケソン市支部の活動内容が印象に残っています。移動用キッチン車で料理を提供したり、無料で医療サービスを行ったりと貧困地域を継続的に支援しています。ケソン市のスラム街の状態の悪い子どもを五十人選び、その母親たちに料理を教えています。料理を教えることも赤十字なのだと言っていました。災害などがあつた時は、低価格住宅を作り提供しているそうです。これまで三万〜四万五千戸作ったそうです。日本の東日本大震災の時に建てた仮設住宅に似ていると思いました。学校訪問では、どの学校もフィリピンの伝統的な踊り



じようになつたら恐いので稼動しない方が良くと思いました。

ゴミ山から五百メートルほど離れたパヤタス地区のソルトパヤタスを訪問しました。そこでボランティアをしている日本人や、実際にパヤタス住んでいる方からお話を聞きました。パヤタスという地域には広大なゴミ投棄場があり、分別されずに次々と運ばれてくるゴミは強烈な悪臭を放っています。その中から再生可能な物を探し拾い、それを業者に売って生計をたてている人たちがいます。時には子どもが混じっていることもあると聞きました。パヤタスに住んでいる人たちはみんながみんなゴミを拾う生活をしているのではなく、洗濯の仕事など自分たちが稼いだお金で生計を立てていて、しっかりとした生活をしていました。しかし政府のゴミ山拡大の意向で、そこに住んでいる人たちが強制的に立ち退きになると聞きそれはかわいそうだと思います。

最後に、今回のフィリピン派遣で体験・見学したことは貴重なことだと感じました。学校訪問やゴミ山見学を通して、

て、フィリピンの貧しい人たちのために募金活動など今できることをやっていきたいと思っています。そして、貧しく学校のない国に学校を建てるのが私の夢です。そのために、世界の貧困問題の現状をもっともっと勉強し、夢の実現のために頑張りたいと考えています。

今年度も 多くの学校・団体が 赤十字救急法を受講

これまでに日赤県支部に報告のあった救急法を受講した学校・団体を掲載しました。

あとがき



第五十号には二年ぶりに再開されたフィリピン派遣の記事を掲載しました。参加メンバーが国際理解と親善の目標を意識した有意義な日々を過ごした様子が描かれています。お忙しい中原稿をお寄せいただいた方々、協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

平成25年度赤十字救急法受講状況

日 時	学 校 ・ 団 体	受 講 者	人数	日 時	学 校 ・ 団 体	受 講 者	人数
基礎講習				7月5日	二本松市立油井小学校	保護者・教職員	64
7月22日	尚志高校	JRC委員及び希望者	32	7月5日	田村市立芦沢小学校	保護者・教職員・児童	56
8月5日	東日本国際大学附属昌平高校	JRCメンバー	18	7月6日	田村市立要田小学校	保護者・教職員	36
8月5日	青少年赤十字会津地区高等学校指導者協議会	JRCメンバー	18	7月6日	田村市立大越小学校	保護者・教職員	49
8月7日	青少年赤十字会津地区高等学校指導者協議会	JRCメンバー	30	7月6日	石川町立沢田小学校	保護者・教職員・児童	13
8月7日	福島県磐城第一高校	JRCメンバー	14	7月7日	郡山市立白岩小学校	保護者・教職員・児童	25
8月19日	青少年赤十字県北地区高等学校指導者協議会	JRCメンバー	9	7月9日	福島県高等学校指導者協議会	JRCメンバー	21
養成講習				7月11日	白河市立五箇小学校	保護者・教職員・児童	50
8月6・7日	東日本国際大学附属昌平高校	JRCメンバー	18	7月11日	いわき市立汐見が丘小学校	児童	123
8月8・9日	福島県磐城第一高校	JRCメンバー	14	7月11日	福島市立平田小学校	保護者・教職員	20
8月20・21日	青少年赤十字県北地区高等学校指導者協議会	JRCメンバー	9	7月12日	本宮市立白岩小学校	保護者・教職員・児童	83
短期講習				7月12日	二本松市立小浜小学校	教職員	12
5月7日	青少年赤十字岩瀬地区指導者協議会	指導者協議会会員	40	7月12日	白河市立白河第1小学校	教職員	20
6月9日	福島市立杉妻小学校	児童・教職員・保護者	172	7月17日	田村市立瀬川小学校	保護者・教職員	34
6月10日	郡山市立朝日が丘小学校	教職員	23	7月17日	白河市立みさか小学校	保護者・教職員・児童	24
6月12日	青少年赤十字田村地区指導者協議会	指導者協議会会員	43	7月22日	福島県立須賀川養護学校	教職員	35
6月13日	青少年赤十字東白川地区指導者協議会	指導者協議会会員	26	7月30日	青少年赤十字両沼地区指導者協議会	教職員・JRCメンバー	65
6月21日	会津若松市立一箕小学校	保護者・教職員	69	7月31日	福島地区青少年赤十字指導者協議会	教職員・JRCメンバー	115
6月25日	青少年赤十字西白河地区指導者協議会	指導者協議会会員	30	8月1日	耶麻地区青少年赤十字指導者協議会	教職員・JRCメンバー	38
6月28日	会津若松市立日新小学校	保護者・教職員	28	8月6日	いわき・相双地区高等学校青少年赤十字指導者協議会	JRCメンバー	26
6月28日	白河市立白河第2小学校	保護者・教職員	56	8月20日	青少年赤十字指導者講習会	教職員	51
6月28日	白河市立白河第3小学校	保護者・教職員	34	8月21日	青少年赤十字西白河地区指導者協議会	保護者・教職員・児童	44
7月2日	郡山市立守山小学校	保護者・教職員・児童	32	9月17日	田村市立移中学校	生徒・教職員	55
7月2日	白河市立大屋小学校	保護者・教職員	21	9月29日	須賀川市立長沼東小学校	保護者・教職員	64
7月2日	郡山市立永盛小学校	保護者・教職員	25	水上安全講習会			
7月2日	郡山市立桜小学校	保護者・教職員	42	6月27日	喜多方市立会北中学校	生徒	70
7月3日	西郷村立羽太小学校	保護者・教職員	36	6月27日	中島村立吉子川小学校	保護者・教職員	50
7月3日	郡山市立高瀬小学校	保護者・教職員	26	7月10・13日	大玉村立大山小・玉井小・大玉中	教職員	29
7月4日	郡山市立高倉小学校	保護者・教職員	32	7月18日	会津若松市立川南小学校	児童	134
7月5日	鏡石町立鏡石第2小学校	保護者・教職員	20				134